令和２年度入学者選抜学力検査問題

（後期日程）

小　論　文

〔人間社会学域
　　法　学　類〕

（注　意）

1　問題紙は指示があるまで開いてはいけません。

2　問題紙は本文９ページです。答案用紙は３枚あります。

3　答えはすべて答案用紙の指定のところに記入しなさい。

4　マス目のある下書き用紙の様式は20字×30行(600字)です。
　答案用紙の１行あたり字数や総字数の指定とは異なる場合があるので，注意して利用してください。

5　問題紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

問題　次ページ以下の文章をよく読んで，次の問いに答えなさい。

問 1　著者は，各種の「世論調査」に現れる「世論」について問題があると考えているが，それはどのような理由によるのか，150 字以内で説明しなさい。

問 2　下線部①のような事態が生じる上で，「ステレオタイプ」がどのような役割を果たしているか，本文を参考に 300 字以内で説明しなさい。

問 3　下線部②はどういうことを意味し，それがどのような原因により，また，どのような影響を及ぼすか，300 字以内で説明しなさい。

問 4　下線部③のような見方にどのような問題があるか簡潔にまとめた上で，それにどう対処すべきか，あなたの考えを 600 字以内で述べなさい。

民主政治は，「世論の支配」とほとんど同じ意味で考えられてきました。しかし，こうした言い換えによって何かが明らかになるでしょうか。「世論の支配」を十分に点検し，それを実効性のあるものにする方法を探ってみましょう。

新聞にほとんど毎月世論調査が載ります。すると，内閣の支持率の上昇や下降が話題になり，さらには個々の政策に対する世論の賛否が明らかになります。政治はそれを横目で見ながら，運営されることになります。しかし，ここで世論を代表して意見を聞かれているのは通常数千人規模の人々であり，一生に一度も世論調査の対象にならない国民が大多数と考えてよいのです。国民の大多数は，「自分は意見を聞かれたことがない」と感じています。ということは，世論調査なるものも「みなし」型の仕組みの一環であるということです。政党もかなり大規模の調査をしていますが，それでもこの現実はそう大きくは変わらないのです。

さらに言えば，調査の質問の作り方によって，調査結果が影響を受けることも広く知られています。単純に言えば，設問の順番からして結果に影響がないわけではありません。通常，回答は一定の数の選択肢から選ぶ形で進められます。そのため，選択肢の言葉づかいや内容によって選択はある程度方向付けられることになります。一言で言えば，そこには調査する側による誘導の余地があるのです。

つまり，世論調査は世論を「鏡のように」映し出すものであるというよりは，一定程度調査する側の意図が反映する（「操作する」とまで言わないとしても）可能性を含んでいるのです。一見精緻な調査に見えるものにも，こうした可能性が入り込む余地があるのです。また，「あれか，これか」の聞き方をするのか，それと並んで「どちらかと言うとあれ又はこれ」という回答を残すかで，結果のイメージが大きく変わってきます。本当は「あれか，これか」を聞きたくても，こうした調査は長期的なトレンドの変化に着目するものですので，一度設定した質問を簡単に変えるわけにはいかないのも実情です。その他，どの時点でどのような調査をするかも，調査する側の裁量があり，その政治的影響もそれによって大きく左右されることになります。

こうした現実は「世論の支配」というものが決して単純なものではなく，中には相当に厄介な問題を抱えていることを示唆しています。民主政治が制度的に実現して以来，最も大きな議論の的になってきたのは，正に「世論の支配」の実態でした。「世論の支配」という言葉自身，世論というものが厳然として「存在」しているというイメー

ジを反映しています。極端に言えば，世論はさながら一つのモノのような形で，その後光が四方八方に発射されているようなものとして「存在」しているといったイメージです。それは民主政治の光り輝く「ご本尊」とでもいうべきものです。

ここから，代表者たちがこの「ご本尊」の意向を推察し，その指令を着実に実行に移すべきだという民主政治論が出てきます。代表は，代理にほとんど解消してしまうような「世論の支配」のイメージです。さらには，この「ご本尊」は政策課題について正しい判断力を備えており，その忠実な実行は国民の利益に合致するという信念とも事実上結びついていました。

この光り輝く「ご本尊」の支配としての，「世論の支配」という考え方がどの程度あったのかはよく分かりませんが，そうした素朴な発想が民主政治論の中に流れ込んでいたことは事実です。しかし，政治の理論家の中で，こうした素朴な議論の信奉者が本当はどれ程いたかといえばそれは大いに疑わしいのです。人民主権の使徒とされるルソーにしても，人民がよく判断を誤ることに心を痛めましたし，ましてや『ザ・フェデラリスト』※などからすれば，こうした民主政治のイメージは，「ないものねだり」の最たるものであったに違いありません。

十九世紀を代表する民主政治の理論家であった，J・S・ミルが最も警戒したのは，「世論の圧制」でした。従って，私が先に紹介したような「世論の支配」のイメージは，それを批判し，再吟味することを意図した理論家が「創作した」反対モデル（当然のことながら，マイナス・モデル）であるという疑いがあります。意地悪く言えば，自分の主張を際立たせるためには，その引立役の案山子（かかし）が必要だったのではないでしょうか。そうかどうかは読者の判断を仰ぐしかないのですが。

十九世紀から二十世紀にかけて，民主化の結果として大衆（mass）が登場してきます。これはミルをはじめ多くの人々が心配していたように，合理的な政治判断を期待できない人々の登場を意味し，十九世紀の知識人が共通に抱いた警戒感でした。功利主義であれ何であれ，合理的な原則に基づいて大衆が判断することをどこまで期待できるか，これが二十世紀初頭の一つの中心的テーマだったのです。これは，人間をどこまで理性的な存在――目的（利害）と手段（政策）との関係について合理的に考える能力がある存在――と考えられるかということを意味しました。

心理学の登場という背景の中で，当時は人間の非合理性の「発見」が学界の一つの流

行となっていました。そうした中で，政治の世界に見られる人間の実像を求める研究が始まります。そして，人間は目的と手段の関係を合理的に考えて政策を判断するような存在であるよりも，本能や衝動，性向，さらには習慣といったものによって支配されたものとして現われたのです。

彼らの分析によれば，現実政治においては，愛憎が大きな支配力を持ち，これに比べれば推論や討論はほとんど無力の状態です。そもそも言葉自身，人々の認識を高めるために使われるよりも，それを操作し，歪(ゆが)めるために使われています。ここでは，言葉は衝動へ訴えて人々を動員するために用いられているのであって，合理的な議論のための道具ではないのです。この「本能と衝動の束」のような大衆には，政治家の「旧友のような微笑(ほほえみ)」に受身的に反応することはできても，それを自らの判断に従ってコントロールする期待は持てません。政治家を自らの代表者としてコントロールするどころか，政治家たちによって「操作される」存在でしかありません。①政治の現実がそうであるとすれば，「世論の支配」は無意味なものとなるのです。

リップマンの『世論』(一九二二)という作品は，こうした二十世紀前半の「世論の支配」に対する幻滅の典型的な現れです。先に述べたような，後光の差した「ご本尊」としての人民，公衆の存在が，ここでは完膚(かんぷ)なきまでに否定されます。人々が政治に興味を持つのは，スローガンか政治家でしかなく，複雑化する政治環境について十分な情報を得た上で判断をするということは，全く期待できません。人間は「自己中心的」な存在であり，自分に関係のある事柄には合理的に判断することができますが，政治は遠い世界の出来事であり，それについての認識や判断は心許(こころもと)なく，偏見や習慣によって支配されているというわけです。

では，複雑化する政治について，十分な情報を得て合理的な判断を下すことができないのは，時間とお金がないためでしょうか。「それは違う」と彼は回答します。人間は複雑な物事については，「見てから判断するのではなく，決定してから見る」という傾向を持っているからです。人間は複雑な物事を見る際に，一定のメガネ(これを彼はステレオタイプと呼びました)をかけて見て，判断を下します。ステレオタイプは人間が生まれると定着し始め，人間そのものと切っても切れないものとなるのです。そして，それが見ようとする対象の選択を予(あらかじ)め決めてしまうために，複雑な現実を公平に冷静に，それ自身として観察するということは，人間には期待できないことに

なります。人間の知覚はステレオタイプに閉じ込められ，それによって知的エネルギーを節約し，見慣れたものを見て安心感を抱きます。ステレオタイプが支配する限り，世論は習慣や偏見と見慣れた世界から離れることができず，その合理性は到底期待できないのです。

新聞などのメディアは，ステレオタイプを補強することには役立っても，それから人間を解放する力を持ちません。人間は楽しみを味わうために新聞を読むのであって，ステレオタイプに一致しない新聞を読もうとしないからです。かくして，世論は合理的な人民の意志とは無縁なものであり，その真の製造元は政治指導者です。大衆は，政治指導者がステレオタイプを念頭にして選んだ選択肢に対して「イエスかノー」を言うだけであり，人民による自己統治という民主政治の原則は限りなく幻影に近づいていく，というわけです。

もし世論が，後光の差す「ご本尊」として存在しているのではなく，本来それに従うべき政治指導者が逆に「製造」したものであるとすれば，「世論の支配」は幻影に過ぎないものとなります。それは自己統治という幻影を振りまく点で，民主主義はかえって始末の悪いものになります。「世論の支配」が，いわば内側から崩壊してしまうからです。それと同時に，こうした議論は政治指導者の役割を積極的に認める方向へとつながっていきます。世論が「存在」するモノではなく，多かれ少なかれ「作られるもの」であるとすれば，それに関与する政治家集団のあり方，それらの間の競争条件などが重要になってきます。世論を「ご本尊」のように神聖化する発想は，政治家の役割を極めて受身的に考えてきましたが，それが大なり小なり逆転を始めます。問題はその逆転がどこまで及ぶかなのです。

この政治指導者重視への逆転が極端に行けば，大衆は自らを「代表させる」能力がないもの，専ら政治指導者によって操作されるものに変わっていきます。大衆は純粋に受身的な存在であり，自己統治などは初めから論外のものとなります。そこから，歴史を支配するのは常によく組織された少数の指導者たちであり，大衆は常に操作される存在であり，遂(つい)には政治の主役になることができないという議論へとつながっていきます。こうした「少数者支配の鉄則」を掲げる立場は，エリート主義と呼ばれます。それは政治的平等と民主化，さらには社会主義の高まりに対する意識的な対抗理論として登場してきました。

彼らによれば，あらゆる社会には支配する階層と支配される階層とがあり，前者は常に権力の独占者として現れます。多数をなす後者は，これに対して全く無力です。彼らは永久に自己統治の能力を持ちません。従って，歴史は少数の支配者グループの間の戦いであり，その変化はある支配者グループが，別のより活力のある支配者グループによって取って代わられるということですが，決して多数者が支配するようになることはありません。かくして歴史は，「エリートの還流」として現れることになります。

このエリートの支配において興味深いのは，この少数者による多数者の支配が，決してむき出しの力にのみ依存しているわけではないとされている点です。多数者，すなわち大衆はさまざまな政治的公式や政治的原理，さらにはイデオロギーに進んで従いますが，実はこのことを利用してエリートの支配が行われています。この政治的公式や政治的原理の中には民主政治の公式――「世論の支配」や政治的・社会的平等とかいったもの――も含まれますし，社会主義的平等の理念も含まれます。

つまり，少数者による支配の現実とは明らかに違った内容を持つ政治的公式もまた，現実には流通していて，そのことは一向に構わないと彼らは言うのです。というのも，こうした政治的公式は「支配の道具」でしかなく，少数者の支配という現実を隠蔽して，支配を容易にする役割を果たしているからです。彼らによれば，政治的な公式は，科学とは無縁の形而上学的偏見や妄想の類であり，「一つの神話」「大いなる迷信」とされます（王は神から支配権を与えられたといった王権神授説と，そんなに違うものではないといいます）。これにより，政治的公式に従って服従する大衆と，それを「支配の道具」として実質的に支配する少数者という二重構造がここにくっきりと現れます。

このエリート対大衆という構図は，二十世紀前半において非常にポピュラーなものとなりました。ある学者はエリートを政治人，すなわち，権力追求者と定義し，エリートになるために求められる条件を，次のように論じました。まず最も大切なのは，象徴を巧みに操作する能力です。先の議論を踏まえて言えば，政治的な公式を巧みに使い，自らの立場を強化し，相手を攻撃する能力です。これはやがて，「宣伝」という形をとって現われます。「宣伝」は人間の攻撃心，罪悪感，愛憎などに訴えて，人々を一定方向へと動員する大きな武器になります。世の中が不安定になればなるほ

ど，「宣伝」はますます欠かすことのできないものとなるのです。第二は暴力の巧みな行使です。政治的な闘いにおいて，決定的な瞬間に相手方の死命を制するような形で暴力を使い，一気に政敵を政治的に破壊することが必要とされます。こうした暴力は，政治的な「テロ」であり，「宣伝」と組み合わせて「テロ」を適切に駆使することが，エリートの大切な能力とされたのです。エリートによる利益の配分・剝奪の機能は，これら二つに比べてあまり重要視されていませんでした。

以上に見られるのは，革命と動乱の時代におけるエリートの姿です。言うまでもなく，その背景には，大戦争(特に，第一次世界大戦)によって，それまでの政治や社会の枠組みが崩壊し，人々が根無し草になったこと，コミュニケーション手段の発達によって情報が人間を動かす「大社会」が誕生したこと，その上，大恐慌や大インフレによって生活基盤が解体したこと，などといった大変動がありました。

こうした大変動は，社会のまとまりを解体し，「世論の支配」の基盤を事実上破壊しましたが，その一方で，政治指導者に大きな負担を負わせ，さらには彼らに自由度と冒険の機会を提供したのでした。政治指導者が「世論の支配」を心がけようとしても，階級の対立や世論そのものの分裂によって手の打ちようがなくなり，民主政治の統治能力に疑問符が付けられるようになりました。それは政治的冒険者たちに，絶好の機会が訪れることを意味しました。「宣伝」と「テロ」が支配の最も重要な手段として登場してきたのは，そのためです。そして，「宣伝」と「テロ」が猛威を振るえば，それまでの社会の仕組みはますます解体し，これらがますます欠かせないものになったのです。

②ここに大きな逆転の物語があります。つまり，「世論の支配」から政治指導者の優位へ，そこから政治指導者による大衆の「操作」へ，そして遂(つい)には「宣伝」と「テロ」に依存した統治体制の構築へという物語です。政治的判断の基準として後光が差していたはずの世論は全く内実のないものに変わり，「宣伝」と「テロ」に反応するだけのものになってしまいました。政治指導者に残っているのは，大衆への深い侮蔑意識です。その一方で，彼らは大衆を動員しつつ，あるいは大衆の支持を演出しつつ，「民主主義的」であるという外観を最大限活用します。しかしこの統治体制を支え，それに方向性を与えているのはあくまで政治指導者であり，極端な場合，それは特定の人物，いわゆる独裁者です。「世論の支配」の破壊の果てに立ち現れたのは「独裁者の支配」でし

た。

この独裁者による大衆の見方を，最もあけすけに述べているのが，アドルフ・ヒトラーの『わが闘争』です。彼は，民族主義革命の実現にとって，大衆の掌握が絶対条件であるということから出発します。しかし，このことは大衆に対する敬意や尊重とは全く無関係です。彼によれば，大衆は英雄心もなければ知性もなく，単に凡庸な存在でしかありません。社会闘争において勝者の後をついて歩くのが精々のところであり，独創性を恐れ，優越した存在を憎むけれども，本当は指導者を欲しがっています。大衆を支配するのは，合理的な議論ではなく，憎悪や熱狂，ヒステリーといった激しい感情というわけです。

こうした大衆を掌握するために必要な心理学を体得するのが，指導者の大切な条件だと彼は言いました。具体的には，大衆には二つ以上の敵を示してはならず，唯一の敵(ヒトラーの場合に，それはユダヤ人でした)にその関心を集中するように(強引にであっても)することが「偉大な指導者の独創力」だったのです。しかも，繰り返し情熱的に同じことを叩き込むことが肝心であって，議論の公平性などといったものはどうでもよいのです。大衆に求められるのは，ただ一つの敵を信じ，その意味での「神話」や「世界観」に絶対的に服従することです。

「大衆は自然の一部である。彼らが欲しているのは，強者の勝利と弱者の絶滅，全面的な屈服である」と彼は言います。その際，必要に応じて暴力を用いることも躊躇すべきではありません。宣伝と暴力による大衆の掌握によって，初めて大衆の時代の政治について語ることが出来るという見地から，ヒトラーは公平性や寛容，平等といったものに配慮するそれまでの政治を徹底的に軽蔑し，それとの訣別を宣言したのです。

これまで述べてきた，「世論の支配」と「独裁者の支配」との大きな揺れを一度検討した後で，この問題をどう整理したらよいでしょうか。この二つの立場は，③有権者に対する過度の楽観主義と過度の悲観主義をそれぞれ代表するもの，と言い換えることができます。「世論の支配」を極端に強調する立場は，有権者が政策面を含め，非常に合理的な判断力を確固として備えているという立場に立っています。それに対して，「独裁者の支配」と表裏の関係にある有権者の姿は，自分の識見なしに非合理的な感情の波間に漂うだけのものでしかありません。この二つの極論の誤りを批判すること

は，それ程難しいことではありませんが，「世論の支配」についてどこに着地点を見出したらよいかについて，考えてみましょう。

注※　『ザ・フェデラリスト』：アメリカ合衆国憲法の批准に向けて，世論に訴えかけるべく執筆された論文集。1788 年に刊行。

佐々木毅『民主主義という不思議な仕組み』(ちくまプリマー新書，2007) 89 ページから 106 ページまでを一部改変の上，引用